

## PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 2000-030740

(43)Date of publication of application : 28.01.2000

(51)Int.Cl.

H01M 10/40  
C07D317/38  
C09K 21/12

(21)Application number : 10-200672

(71)Applicant : TOYOTA CENTRAL RES & DEV  
LAB INC

(22)Date of filing : 15.07.1998

(72)Inventor : SHIGA TORU  
AOKI YOSHIFUMI  
TAKECHI KENSUKE

## (54) LITHIUM SECONDARY BATTERY

## (57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide a lithium secondary battery with high battery characteristics, especially high charge/discharge cycle characteristics, high fire resistance, and capable of producing at low cost.

SOLUTION: This lithium secondary battery consists of a positive electrode capable of absorbing/releasing lithium, a negative electrode using a graphite base carbon material as a negative active material, and an organic electrolyte prepared by dissolving a lithium salt in an organic solvent, and the organic solvent contains 15-50 vol.% ethylene carbonate based on 100 vol.% of the total volume, and also contains 0.5-2.5 vol.% phosphazene compound.

## LEGAL STATUS

[Date of request for examination]

[Date of sending the examiner's decision of  
rejection][Kind of final disposal of application other than  
the examiner's decision of rejection or  
application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision  
of rejection][Date of requesting appeal against examiner's  
decision of rejection]

[Date of extinction of right]

Copyright (C) 1998,2000 Japan Patent Office

(19)日本国特許庁 (JP)

## (12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2000-30740

(P2000-30740A)

(43)公開日 平成12年1月28日 (2000.1.28)

(51)Int.Cl.<sup>7</sup>

H 01 M 10/40  
C 07 D 317/38  
C 09 K 21/12

識別記号

F 1

H 01 M 10/40  
C 07 D 317/38  
C 09 K 21/12

テマコード<sup>\*</sup>(参考)

A 4 H 02 8  
5 H 02 9

審査請求 未請求 請求項の数1 O L (全 8 頁)

(21)出願番号

特願平10-200672

(22)出願日

平成10年7月15日 (1998.7.15)

(71)出願人 000003609

株式会社豊田中央研究所  
愛知県愛知郡長久手町大字長湫字横道41番  
地の1

(72)発明者 志賀 亨

愛知県愛知郡長久手町大字長湫字横道41番  
地の1 株式会社豊田中央研究所内

(72)発明者 青木 良文

愛知県愛知郡長久手町大字長湫字横道41番  
地の1 株式会社豊田中央研究所内

(74)代理人 100081776

弁理士 大川 宏

最終頁に続く

(54)【発明の名称】 リチウム二次電池

(57)【要約】

【課題】 電池特性、特に充放電サイクル特性および難燃性に優れ、かつ安価に製造することができるリチウム二次電池を提供する。

【解決手段】 本発明のリチウム二次電池は、リチウムイオンを吸蔵・放出できる正極と、黒鉛系炭素材料が負極活性物質に用いられている負極と、リチウム塩が有機溶媒に溶解されてなる有機電解液とから構成され、該有機電解液は、その全量を100体積%とすると、エチレンカーボネートを15~50体積%の範囲内で含み、かつホスファゼン化合物を0.5~2.5体積%の範囲内で含むことを特徴とする。

## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 リチウムイオンを吸収・放出できる正極と、黒鉛系炭素材料が負極活物質に用いられている負極と、リチウム塩が有機溶媒に溶解されてなる有機電解液とから構成され、該有機電解液は、その全量を100体積%とすると、エチレンカーボネートを15～50体積%の範囲内で含み、かつホスファゼン化合物を0.5～2.5体積%の範囲内で含むことを特徴とするリチウム二次電池。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、黒鉛系炭素材料が負極活物質に用いられているリチウム二次電池に關し、詳しくは自動車のバッテリーに利用することができるものに關する。

## 【0002】

【従来の技術】 黒鉛系炭素材料が負極活物質に用いられているリチウム二次電池は、高い出力電圧と大きな放電容量を有するため、携帯用パソコンや携帯電話、ビデオカメラなどの電子機器の分野で実用化され、広く普及するに至っている。このようなリチウム二次電池の電解液には、誘電率が高いこと、電極に対する化学的安定性および電気化学的安定性が高いこと、リチウムイオンの移動を妨げないように粘度が低いこと、並びに安全性が高いことなどが要求され、リチウム塩が有機溶媒に溶解されてなる有機電解液が一般的に用いられている。

【0003】 誘電率が高いことについては、電池の基本性能に關わることから優先的に考慮され、従来より、有機電解液の有機溶媒には、エチレンカーボネート(ECT)などの高誘電率溶媒を主成分とするものが広く用いられている。特に、このような有機電解液には、溶媒の粘度を低くするためにジエチルカーボネート(DEC)などの低粘度溶媒を第2成分として含ませたものが多く用いられている。このような有機電解液は、黒鉛系炭素材料または非黒鉛系炭素材料を負極活物質に用いた電池のいづれにも使用できる。特に、反応性の高い黒鉛系炭素材料を負極活物質に用いた電池においては、ECTが電極に対して化学的安定性および電気化学的安定性に優れ、優れた電池性能を得るのに極めて有効であることが知られている。

【0004】 自動車に搭載可能なりチウム二次電池の負極には、電圧平坦性や大電流性能の良さから黒鉛系炭素材料を用いることが望ましい。このような黒鉛系炭素材料に対して安定で、かつ安価な電解液を提供する必要がある。さらに、リチウム二次電池を自動車に利用しようとする場合、安全性の観点から、不燃性または難燃性に優れた電池が求められる。しかしながら、ECTを主成分とする有機電解液が用いられたりチウム二次電池においては、有機電解液に引火の恐れがある。中でも、DECなどの低粘度溶媒の引火点が室温の近傍にあることか

ら、有機電解液により引火の恐れがある。

【0005】 このような有機電解液を難燃化する方法として、有機電解液にフッ素原子を導入する方法(特開平10-50343号公報および特開平10-12272号公報)や、-PN-結合を有するホスファゼン化合物(特開平6-13108号公報および文献Journal of Electrochemical society、143卷、209ページ、1996年)などの無機溶媒を用いる方法が提案されている。しかしながら、前者の方法では、有機溶媒にフッ素原子を導入するには複雑な合成を行う必要があり、コストが高くなるという問題がある。また、後者の方法では、ホスファゼン化合物を用いる場合、特開平6-13108号公報に、黒鉛系炭素材料を負極活物質として用いた電池においても適用できる旨の記述があるが、本発明者らがその実施形態の記述に従って追試を行った結果、黒鉛系炭素材料とホスファゼン化合物とが充放電時に反応するなどして、充放電を繰り返すうちに充放電効率が低下していくことがわかった。

【0006】 以上のように、従来のリチウム二次電池には、優れた充放電サイクル特性、難燃性および安価であることの全てを合わせ持つものはなかった。

## 【0007】

【発明が解決しようとする課題】 本発明は上記実情に鑑みてなされたものであり、電池特性、特に充放電サイクル特性および難燃性に優れ、かつ安価に製造することのできるリチウム二次電池を提供することを課題とする。

## 【0008】

【課題を解決する手段】 本発明者らは上記課題を解決するべく、黒鉛系炭素材料を負極活物質に用いたリチウム二次電池において、電解液に使用する溶媒成分を検討し、特にECTとホスファゼン化合物とを含む有機電解液について、その最適な組成を鋭意研究した。その結果、次のことがわかった。なお、ECTおよびホスファゼン化合物の含量は、有機電解液の全量を100体積%としたときの値である。

【0009】 ECTの含量が15体積%未満であると、電解液の誘電率が低くて十分な電池特性が得られないばかりでなく、黒鉛系炭素材料の負極活物質と有機電解液との間に分解反応が起こりやすくなる。そのため、充放電を繰り返すうちに充放電効率が低下してしまう。また、ECTの含量が50体積%を超えると、-10°C付近より低い温度でECTが析出したり、電解液そのものが凍結する。そのため、低温域での充放電効率が低下してしまう。

【0010】 一方、ホスファゼン化合物の含量が0.5体積%未満であると、十分な難燃性を有する有機電解液が得られない。また、ホスファゼン化合物の含量が2.5体積%を超えると、充放電時に負極表面での分解反応が増大する。そのため、充放電を繰り返すうちに充放電

効率が大きく低下してしまう。こうして、本発明者らは、ECを15～50体積%の範囲内で含み、かつホスファゼン化合物を0.5～2.5体積%の範囲内で含む有機電解液を用いることにより、上記課題を解決できることをついに見出した。本発明はこのような知見に基いてなされたものである。

【0011】すなわち、本発明のリチウム二次電池は、リチウムイオンを吸収・放出できる正極と、負極活物質として黒鉛系炭素材料が用いられている負極と、リチウム塩が有機溶媒に溶解されてなる有機電解液とから構成されるリチウム二次電池において、前記有機電解液は、その全量を100体積%とすると、エチレンカーボネートを15～50体積%の範囲内で含み、かつホスファゼン化合物を0.5～2.5体積%の範囲内で含むことを特徴とする。

【0012】本発明のリチウム二次電池は、電池特性、特に充放電サイクル特性および難燃性に優れ、かつ安価に製造することができる。その理由については、次のように考えられる。有機電解液に含まれるECの含量が15～50体積%の範囲内に限定されているため、有機電解液において十分に高い誘電率が得られ、かつ負極活物質と有機電解液との間の分解反応も起こりにくい。さらに低温域においても優れた充放電効率が得られる。

【0013】一方、ホスファゼン化合物の含量が0.5～2.5体積%の範囲内に限定されているため、有機電解液において十分な難燃性が得られ、充放電時における負極表面での分解反応を増大させることもない。また、ホスファゼン化合物のECによる溶媒和が生じることにより、ホスファゼン化合物のもつ高い難燃度が失われることなく、その黒鉛系炭素材料との反応性が抑制されていると推察される。

【0014】有機電解液にホスファゼン化合物を0.5～2.5体積%の範囲内で含ませるには、複雑な合成方法などを必要とせず、他の成分と単に混合するだけでもいため、極めて容易に含ませることができる。それゆえ、本発明に使用される有機電解液は極めて安価に調製することができる。

【0015】

【発明の実施の形態】本発明のリチウム二次電池は、正極と、負極と、それらの電極の間に介在する電解液と、これらを収容する電槽とから基本的に構成される。その電極構造（積層構造）についてはそれぞれ特に限定されるものではなく、公知の電極構造とができる。例えば、正極および負極とともに平板状の電極板を用い、これらの間に同じく平板状のセハレータを介在させて積層してなるものが挙げられる。この電極構造を有する電池には、コイン型電池や、角型電池等がある。また、正極および負極とともに帶状の電極板を用い、これらの間にセハレータを介在させて略円柱状に巻りしてなるものも挙げられる。

【0016】以下、各部品に分けて本発明のリチウム二次電池の実施形態を説明する。正極は、リチウムイオンを吸収・放出できるものであれば、その形態で特に限定されるものではなく、公知の形態のものを用いることができるが、次のような形態のものを用いることが好ましい。正極活物質の種類については特に限定されるものではなく、公知の正極活物質を用いることができるが、 $\text{LiCoO}_2$ 、 $\text{LiNiO}_2$ 、 $\text{LiMn}_2\text{O}_4$ などのリチウム遷移金属複合酸化物を用いることが好ましい。このようなリチウム遷移金属複合酸化物を正極活物質として用いることにより、極めて優れた電池特性を得ることができる。

【0017】また、適当な集電体の表面上に、正極活物質を主成分とする正極活物質層が一様に形成された電極体を用いることが好ましい。その形成方法については、特に限定されるものではなく、公知の形成方法によって形成することができる。一方、負極は、黒鉛系炭素材料が負極活物質に用いられ、正極から放出されたリチウムイオンを吸収・放出できるものであれば、その形態で特に限定されるものではないが、次のような形態のものを用いることが好ましい。

【0018】負極活物質の種類については、天然黒鉛、人造黒鉛などの黒鉛系炭素材料が含まれているものに限られる。このような負極活物質には、ハードカーボンや熱処理コークスなどの非黒鉛系炭素材料が黒鉛系炭素材料に混合されているものを用いてもよい。また、黒鉛系炭素材料の表面を非晶質の炭素材料で被覆したものを用いてもよい。このような黒鉛系炭素材料の原料には、球状、りん片状、纖維状などの黒鉛系炭素材料を用いることができる。

【0019】負極についても、適当な集電体の表面上に、負極活物質を主成分とする負極活物質層が一様に形成された電極体を用いることが好ましい。その形成方法については、特に限定されるものではなく、公知の形成方法によって形成することができる。本発明を最も特徴づける有機電解液は、リチウム塩が有機溶媒に溶解されてなるものであり、その全量を100体積%とすると、ECを15～50体積%の範囲内で含み、かつホスファゼン化合物を0.5～2.5体積%の範囲内で含むものである。この有機電解液には、次のような形態のものを用いることが好ましい。

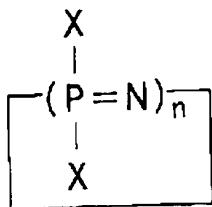
【0020】リチウム塩は特に限定されるものではなく、 $\text{LiPF}_6$ 、 $\text{LiBF}_4$ 、 $\text{LiClO}_4$ 、 $\text{LiAsF}_6$ 、 $\text{LiC}_6\text{F}_5\text{SO}_3$ 、リチウムトリフルオロメタンスルホニミドなどの公知のリチウム塩を用いることができる。これらリチウム塩の複数種を含んでいる有機電解液を用いてもよい。一方、ホスファゼン化合物には環状のものと鎖状のものがあるが、本発明のリチウム二次電池においてはいずれを用いてもよい。

【0021】前者のホスファゼン化合物を用いる場合に

は、化学式1に示される環状3量体または環状4量体( $n=3, 4$ )のホスファゼン化合物を用いることが好ましい。

【0022】

【化1】

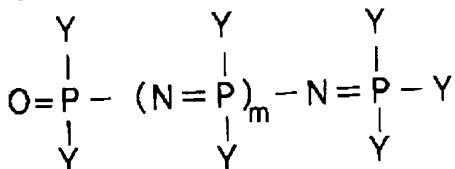


【0023】P原子の側鎖Xにはアルコキシ基があるが、炭素数5以上のものでは充放電時に分解しそういため、炭素数1~4のアルコキシ基が好ましい。このような炭素数1~4のアルコキシ基として、具体的にはメトキシ基、エトキシ基、フロボキシ基、イソプロボキシ基、ブトキシ基、SEC-ブトキシ基およびtert-ブトキシ基などが挙げられる。また、アルコキシ基の一部がフッ素化されたものを用いることもできる。一方、P原子の側鎖として塩素や臭素なども考えられるが、還元電位が低く分解しやすいので好ましくない。

【0024】後者のホスファゼン化合物を用いる場合には、化学式2に示される鎖状のホスファゼン化合物を用いることが好ましい。

【0025】

【化2】



【0026】P原子の側鎖Yは化学式1のXと同じとすことができる。ただし、化学式2における繰り返し単位数mが5以上であると、このホスファゼン化合物を電解液に溶解させることができ難くなるため5以下のが好ましい。有機電解液におけるECおよびホスファゼン化合物の残りの溶媒成分は、特にその種類で限定されるものではないが、低粘性溶媒であるDECや、ジメチルカーボネート、エチルメチルカーボネート、ジメトキシメタン、2-メチルヒドロフランなどを含ませることが好ましい。これらの有機溶媒の複数種を含んでいる有機電解液を用いてもよい。

【0027】また、スルホラン、カンマブチロラクトン、フロビレンカーボネートなどの高誘電率溶媒を含ませることもできる。これら有機溶媒の複数種を含んでいるものを用いてもよい。電槽については、その形態で特に限定されるものではなく、公知のものを用いることができる。

【0028】本発明のリチウム二次電池では、正極と負極との間の間隔を維持することができれば、必ずしもそ

れらのセパレータを介在させる必要はないが、電極板を積層するものにおいては、セパレータを介在させることによりそれらの電極板の積層を容易にすることができる。また、セパレータに、ホリエチレンやホリフロヒレン製の微多孔質のものを用いれば、電流のシャットダウン機能が得られ、電池の安全性を高めることができる。

【0029】

【実施例】以下、実施例により、本発明を具体的に説明する。

(実施例1) 本実施例では、ホスファゼン化合物として、環状のヘキサエトキシトリシクロホスファゼン(HETCPN)を含む有機電解液を次のようにして調製した。ヘキサクロロトリシクロホスファゼン(フルカ製)とナトリウムエチラート(和光純薬製)とをテトラヒドロフラン(THF)中で、THFを還流させながら反応させてHETCPNを合成した。

【0030】こうして合成されたHETCPN、EC、DECおよびLiPF<sub>6</sub>(富山薬品工業製)をそれぞれ所定の割合で混合して、表1に示すようにECとHETCPNの含量が異なる有機電解液を9種類調製した。なお、これら9種類の有機電解液はいずれも、LiPF<sub>6</sub>の濃度が1モル/リットルであり、かつDECの含量が50体積%である。これらの有機電解液を試料1~9とした。

【難燃性試験】長さ120mm、厚さ25μm、幅8mmのポリエチレン製セパレータ(東燃化学製、品名セテラ)を9枚用意した。これらのセパレータを50°Cにて真空乾燥して十分に水分を除いた後、各セパレータを上述の9種類の有機電解液(試料1~9)に浸漬して、それぞれに有機電解液を含浸させた。続いて、これらのセパレータをそれぞれ大気中に取り出して、一端を固定してぶらさげた後、マッチにより着火した。火が消えた後、残存したセパレータをジメトキシエタンで十分に洗浄し、乾燥させた後の重量を計測した。その計測結果を表1に併せて示す。本難燃性試験においては、残存セパレータ量が8.5mg以上のものが難燃性に優れていると言える。

【充放電サイクル特性】上述の9種類の有機電解液(試料1~9)を用いて、以下のようにしてリチウム二次電池を作製した。なお、以下の説明では、「部」は重量比を意味するものとする。

【0031】リチウムマンガン複合酸化物(本荘ケミカル製)を1.8.5部、カーボンブリック(東海カーボン製)を1.5部、ホリフッ化ビニリデン(PVDF)(クレハ化学製)粉末を8部、N-メチルヒロリドン(和光純薬製)を7.2部づつ用意し、これらを十分に混合して正極用スラリーを得た。この正極用スラリーを厚さ20μmのアルミ箔上に塗布して正極材料を得た。

【0032】一方、人造黒鉛(MCNB)(大阪ガス化学製)を9.5部、PVDFを5部づつ用意し、これらを

N-メチルヒロリドン100部に溶解させて負極用スラリーを得た。この負極用スラリーを銅箔上に塗布して負極材料を得た。次に、上述の正極材料と負極材料とから、直径1.7mmの円盤状の正極板および負極板をそれぞれ9枚づつ打ち抜いた。これらの円盤状の電極板の間にそれぞれホリエチレン製セバレータを挟み込んだ。各セバレータに上述の9種類の有機電解液（試料1.1～1.9）をそれぞれ含浸させて9種類のリチウム二次電池を作製した。

【0033】各リチウム二次電池について、1mA/cm<sup>2</sup>の定電流で4.2Vまで充電した後、4.2Vの定

試料番号	EC (体積%)	HETCPN (体積%)	放電容量 (mAh/g)	残存セバレータ量 (mg)
1.1	50	0	6.1	7.6
1.2	49.9	0.1	6.0	8.2
1.3	49.5	0.5	5.8	9.8
1.4	49.0	1.0	5.7	12.2
1.5	47.5	2.5	5.4	12.7
1.6	46.0	4.0	4.2	13.5
1.7	43.7	6.3	3.4	13.1
1.8	37.5	12.5	1.7	14.3
1.9	25.0	25.0	1.8	14.8

表1より、試料1.3～1.5の有機電解液を用いたリチウム二次電池が、充放電サイクル特性および難燃性の両方に優れることがわかる。これらリチウム二次電池の有機電解液は、いずれも、有機電解液の全量を100体積%とすると、ECを1.5～5.0体積%の範囲内で含み、かつホスファゼン化合物（HETCPN）を0.5～2.5体積%の範囲内で含むものである。

（比較例1）実施例1と同様にして合成したHETCPNとDECとを体積比にして1:1で混合して有機溶媒を得た。この有機溶媒を用い、実施例1と同様にして、LiPF<sub>6</sub>の濃度が1モル/リットルであり、かつDECの含量が50体積%である有機電解液を調製した。

【0035】こうして調製された有機電解液について、実施例1と同様にして難燃性試験を行った。その結果を表2に示す。また、この有機電解液を用いて実施例1と同様にリチウム二次電池を作製し、充放電試験を行った。10サイクル目での放電容量を表2に併せて示す。なお、初期における放電容量は3.2mAh/gであった。

【0036】表2より、本比較例のリチウム二次電池は、高い難燃性を示すものの、充放電サイクル特性に劣ることがわかる。

【0037】

【表2】

電圧のままさらずに充電を続けた。こうして充電が完了した各電池を0.5mA/cm<sup>2</sup>の定電流で放電し、初期の放電容量と10サイクル後の放電容量をそれぞれ測定した。各電池の10サイクル後の放電容量を表1に併せて示す。なお、各電池の初期における放電容量は3.9～7.2mAh/gであった。また、本充放電試験においては、10サイクル後の放電容量が4.5mAh/g以上であるものが充放電サイクル特性に優れていると言える。

【0034】

【表1】

	放電容量 (mAh/g)	残存セバレータ量 (mg)
比較例1	8.1	15.4
比較例2	1.6	16.4
比較例3	5.6	3.5
比較例4	0.3	13.5
比較例5	1.0	13.4

（実施例2）本実施例では、ホスファゼン化合物として、HETCPNの代わりに環状のヘキサ（トリフルオロエトキシ）トリシクロホスファゼン（HETCPN）を用いた以外は実施例1の有機電解液と同じ有機電解液を次のようにして調製した。

【0038】トリフルオロエタノール（和光純薬）と水素化ナトリウム（和光純薬）とを反応させてナトリウムトリフルオロエトキシドを得た。このナトリウムトリフルオロエトキシドとヘキサクロロトリシクロホスファゼン（フルカ製）とをTHF中で、THFを還流しながら反応させてHETCPNを合成した。こうして合成されたHETCPN、EC、DECおよびLiPF<sub>6</sub>（富山薬品工業製）をそれぞれ所定の割合で混合して、表3に示すようにECとHETCPNの含量が異なる有機電解液を8種類調製した。なお、これら8種類

の有機電解液はいずれも、LiPF<sub>6</sub>の濃度が1モルリットルであり、かつDECの含量が50体積%である。これらの有機電解液を試料21～28とした。

【003-9】こうして調製された各有機電解液（試料21～28）について、実施例1と同様にして難燃性試験を行った。その結果を表3に示す。また、これら各有機電解液を用いて実施例1と同様にリチウム二次電池をそ

れぞれ作製し、各電池について同様に充放電試験を行った。各電池の10サイクル目での放電容量を表3に併せて示す。なお、各電池の初期における放電容量は3.3～7.2 mAh/gであった。

【004-0】

【表3】

試料番号	EC (体積%)	HETCPN (体積%)	放電容量 (mAh/g)	残存セバレータ量 (mg)
21	50	0	6.0	7.5
22	49.5	0.5	5.7	8.6
23	49.0	1.0	5.1	9.6
24	48.5	1.5	4.8	12.7
25	47.5	2.5	3.8	12.9
26	45.0	5.0	1.4	15.1
27	37.5	12.5	1.0	14.8
28	25.0	25.0	8.5	16.2

表3より、試料22～25の各有機電解液を用いたリチウム二次電池は、いずれも、充放電サイクル特性および難燃性の両方に優れることがわかる。これらのリチウム二次電池の有機電解液は、いずれも、有機電解液の全量を100体積%とすると、ECを1.5～5.0体積%の範囲内で含み、かつホスファゼン化合物（HETCPN）を0.5～2.5体積%の範囲内で含むものである。

（比較例2）実施例2と同様にして合成したHETCPNと、DECとを体積比にして1:1で混合して有機溶媒を得た。この有機溶媒を用い、実施例1と同様にして、LiPF<sub>6</sub>の濃度が1モルリットルであり、かつDECの含量が50体積%である有機電解液を調製した。

【004-1】こうして調製された有機電解液について、実施例1と同様にして難燃性試験を行った。その結果を表2に示す。また、この有機電解液を用いて実施例1と同様にリチウム二次電池を作製し、充放電試験を行った。10サイクル目での放電容量を表2に併せて示す。なお、初期における放電容量は2.5 mAh/gであった。

【004-2】表2より、本比較例のリチウム二次電池は、高い難燃性を示すものの、充放電サイクル特性に劣ることがわかる。

（比較例3）本比較例では、ECとDECとを体積比にして1:1で混合して有機溶媒を得た。この有機溶媒にLiBF<sub>4</sub>を1モルリットルで溶解して有機電解液を調製した。

【004-3】こうして調製された有機電解液について、実施例1と同様にして難燃性試験を行った。その結果を

表2に示す。また、この有機電解液を用いて実施例1と同様にリチウム二次電池を作製し、充放電試験を行った。10サイクル目での放電容量を表2に併せて示す。なお、初期における放電容量は7.3 mAh/gであった。

【004-4】表2より、本比較例のリチウム二次電池は優れた充放電サイクル特性を有するものの、その難燃性は劣ることがわかった。

（実施例3）本実施例では、ホスファゼン化合物として、HETCPNの代わりに鎖状のジブトキシホスホニルホスホリミックトリブドキシド（BPPTB）を用いた以外は実施例1の有機電解液と同じ有機電解液を次のようにして調製した。

【004-5】硫酸アンモニウム（和光純薬製）と五塩化リシン（和光純薬製）とを134℃に加熱されたテトラクロロエタン（和光純薬）中で反応させてクロロホスホニルホスホリミックトリクロリド（CPPTC）を得た。このCPPTCとナトリウムブトキシド（半井化学製）とをTHF中で、THFを還流しながら反応させてBPPTBを合成した。

【004-6】こうして合成されたBPPTB、EC、DECおよびLiBF<sub>4</sub>（富山薬品工業製）をそれぞれ所定の割合で混合して、表4に示すようにECとBPPTBの含量が異なる有機電解液を6種類調製した。なお、これら6種類の有機電解液はいずれも、LiPF<sub>6</sub>の濃度が1モルリットルであり、かつDECの含量が7.0体積%である。これらの有機電解液を試料31～36とした。

【004-7】こうして調製された各有機電解液（試料31～36）について、実施例1と同様にして難燃性試験

を行った。その結果を表4に示す。また、これら各有機電解液を用いて実施例1と同様にリチウム二次電池をそれぞれ作製し、各電池について同様に充放電試験を行った。各電池の10サイクル目での放電容量を表4に併せて示す。

試料番号	EC (体積%)	B P P T B (体積%)	放電容量 (mAh/g)	残存セバレータ量 (mg)
3 1	3 0	0	5 4	4. 1
3 2	2 9. 9	0. 1	5 0	5. 2
3 3	2 9. 5	0. 5	4 6	8. 8
3 4	2 9. 0	1. 0	4 2	1 2. 4
3 5	2 7. 5	2. 5	4 0	1 2. 1
3 6	2 5. 0	5. 0	2 5	1 3. 1

表4より、試料3 3～3 5の各有機電解液を用いたリチウム二次電池は、いずれもサイクル特性および難燃性の両方に優れることがわかる。これらのリチウム二次電池の有機電解液は、その全量を100体積%とすると、ECを15～50体積%の範囲内で含み、かつホスファゼン化合物(B P P T B)を0.5～2.5体積%の範囲内で含むものである。

(比較例4) 実施例3で得たC P P T C(塩素が置換されたもの)と、EC、DECおよびL i B F 4(富山薬品工業製)をそれぞれ所定の割合で混合して、ECの含量が25体積%であり、かつC P P T Cの含量が5体積%である有機電解液を調製した。なお、この有機電解液は、L i B F 4の濃度が1モル/リットルであり、かつDECの含量が70体積%である。

【0049】こうして調製された有機電解液について、実施例1と同様にして難燃性試験を行った。その結果を表2に示す。また、この有機電解液を用いて実施例1と同様にリチウム二次電池を作製し、同様の充放電試験を行った。10サイクル目での放電容量を表2に併せて示す。なお、初期における放電容量は49mAh/gであった。

【0050】表2より、本比較例のリチウム二次電池は、高い難燃性を示すものの、サイクル特性にかなり劣ることがわかる。

(比較例5) C P P T Cの含量が0.1%である以外は比較例4と同様の有機電解液を調製した。

【0051】こうして調製された有機電解液について、実施例1と同様にして難燃性試験を行った。その結果を表2に示す。また、この有機電解液を用いて実施例1と同様にリチウム二次電池を作製し、同様の充放電試験を行った。10サイクル目での放電容量を表2に併せて示す。なお、初期における放電容量は63mAh/gであった。

【0052】表2より、本比較例のリチウム二次電池は、高い難燃性を示すものの、サイクル特性にかなり劣

て示す。なお、各電池の初期における放電容量は4.5～7.4mAh/gであった。

#### 【0048】

##### 【表4】

ることがわかる。

(実施例4) ホスファゼン化合物として、B P P T Bの代わりにジ-tert-ブトキシホスホニルホスホリミックジ(tert-ブトキシド)を用いた以外は実施例3の有機電解液と同じ有機電解液を実施例3と同様にして調製した。なお、本実施例では、tert-ブトキシドの含量を0.5体積%とした。

【0053】こうして調製された有機電解液について、実施例1と同様にして難燃性試験を行った。その結果を表5に示す。また、この有機電解液を用いて実施例1と同様にリチウム二次電池を作製し、同様の充放電試験を行った。10サイクル目での放電容量を表5に併せて示す。なお、初期における放電容量は60mAh/gであった。

#### 【0054】

##### 【表5】

	放電容量 (mAh/g)	残存セバレータ量 (mg)
実施例4	4 4	1 2. 7

表5より、この有機電解液を用いたリチウム二次電池は、充放電サイクル特性および難燃性の両方に優れることがわかる。

(実施例5) ホスファゼン化合物として、H E T C P Nの代わりに鎖状のホスホニトリックエトキシド(P P P E T)を用いた以外は実施例1の有機電解液と同じ有機電解液を次のようにして調製した。

【0055】ヘキサクロロトリシクロホスファゼン(フジカ製)を、過硫酸アンモニウムを触媒として用いて熱重合させた。得られた重合体をベンゼンに溶かして不溶の反応生成物を濾過した後、その濾液(ベンゼン溶液)にナトリウムエチラート(和光純薬)を加えて加熱し、P P P E Tを合成した。こうして合成されたP P P E

T、EC、DECおよびLiPF<sub>6</sub>（富山薬品工業製）をそれぞれ所定の割合で混合して、表4に示すようにECとPPPETの含量が異なる有機電解液を5種類調製した。なお、これら5種類の有機電解液はいずれも、LiPF<sub>6</sub>の濃度が1モル/リットルであり、かつDECの含量が70体積%である。これらの有機電解液を試料51～55とした。

【0056】こうして調製された各有機電解液（試料51～55）について、実施例1と同様にして難燃性試験

を行った。その結果を表6に示す。また、これら各有機電解液を用いて実施例1と同様にリチウム二次電池をそれぞれ作製し、各電池について同様に充放電試験を行った。10サイクル目での放電容量を表6に併せて示す。なお、各電池の初期における放電容量は3.5～7.5 mAh/gであった。

【0057】

【表6】

試料番号	EC (体積%)	PPPET (体積%)	放電容量 (mAh/g)	残存セバレータ量 (mg)
51	30	0	54	4.1
52	29.5	0.5	48	10.4
53	27.5	2.5	47	13.5
54	25.0	5.0	32	14.1
55	22.5	7.5	15	14.2

表6より、試料51～55の各有機電解液を用いたリチウム二次電池は、いずれもサイクル特性および難燃性の両方に優れることがわかる。このリチウム二次電池の有機電解液は、その全量を100体積%とすると、ECを

15～50体積%の範囲内で含み、かつホスファゼン化合物（PPPET）を0.5～2.5体積%の範囲内で含むものである。

フロントページの続き

(72)発明者 武市 審典  
愛知県愛知郡長久手町大字長湫字横道41番  
地の1株式会社豊田中央研究所内

Fターム(参考) 4H028 AA38 BA05  
5H029 AJ02 AJ05 AJ12 AJ14 AK03  
AL07 AM02 AM03 AM04 AM05  
AM07 BJ02 BJ03 BJ14 DJ08  
EJ11 HJ07